サンジェエフ編・ルミャンツェフ註
「ドルジ=バンザロフ著作集」

護　雅　夫

Doržì Banzarov, Sobranie Sočinenij (Otvetstvennyj redaktor—G. D. Sanžeev. Podgotovka k pečati i primečaniya—G. N. Rumyancev. Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR, Moskva, 1955).

一

一九五五年三月は、ブリヤート-モンゴルが初めて生んだ學者、ドルジ=バンザロフの死後百年目に當つてゐる。茲に簡單に紹介しようとするのは、ブリヤート-モンゴル文化研究所が一九四〇年から企畫し、五五年にソ聯科學學士院出版所から出版したかれの著作集である。かれのいはば「選集」は、一八九一年に、ポターニン (Potanin, G. N.) によつて「ドルジ=バンザロフの黒教すなはちモンゴル人におけるシャーマン教その他の諸論文」なる名のもとに、編輯・出版されたことがある。しかし今度出たのは、その「選集」の論文に新たに三論文を加へるとともに、もとドイツ語だつたもの（「選集」には入れられず）をロシア語に飜譯して收め、傳記その他關係文獻、註などの加へられた、正しく「ドルジ=バンザロフ全集」の名に値するものである。(1) その構成を示すと左の如くである。なほ、既にポターニン編輯の「選集」に收められたものは＊印で、もとドイツ語で、本著作集に入れるに當つてロシア語譯されたものは〇印で、それぞれ示した。

序文——ドルジ=バンザロフ小傳（ハプタエフ [Xaptaev, P. T.]）

一八四六年より五〇年に至る、ドルジ=バンザロフの著作——(1)白月、モンゴル人の新年の祭り——＊(2)黒教、すなはちモンゴル人におけるシャーマン教——(3)アレクサンドル=ポポフ著「カルムィク語文典」——〇(4)中央アジアの二つのアルファベットについて——(5)帝國科學學士院所藏滿洲語書籍・寫本目録——〇(6)エカテリノスラフ縣、アー=フォン=シュティグリッツ男爵領發見の銀牌子に刻されたモンゴル語銘文の解釋——＊(7)パイヅェ、すなはちモンゴルのハンの勅令を附した金屬牌子——＊(8)若干の古代ロシアの武器の東方的名稱について——＊(9)「モンゴル」といふ名前の起源について——＊(10)「チンギス」といふ言葉の起源について——＊(11)エルゲネ-ホンといふ名稱について——＊(12)オイラートとウ

イグルとについて――＊⒀チンギス＝ハンの甥イスンケ大公碑のモンゴル語銘文の解釋――＊⒁トフタムィシ＝ハンの詔勅中のモンゴリズム（「選集」では、「モンゴル語の術語」）に關する所見。

ドルジ＝バンザロフの書簡及び文獻資料――⑴書簡（十九通）――⑵一八三五年より一八五〇年に至る、ドルジ＝バンザロフに關する文獻資料（二二通）。

附錄――註（四二二項目、ルミャンツェフ[Rumyancev, G.N.]）――ドルジ＝バンザロフの系圖（トゥグトフ[Tugutov, R. F.]）――バンザロフの著作目錄――デー＝バンザロフに關する文獻書目。寫眞及挿圖七葉。

さて、先づハプタエフの筆になる「バンザロフ小傳」は、露清間のブラ條約の締結（一七二七年）、續いて、その國境地帶における、ブリヤート＝モンゴル、コザックの、二重の壓迫――一つはツァーリズムの、二つはブリヤート人自身のノヤン・ラマ・シャーマンなどの――下に呻吟する、苦難に充ちた生活、その社會・經濟的な後進性の敍述から始めてゐる。蓋しこの「優れた學者ドルジ＝バンザロフが生き、そして仕事をした」のは、正にさうした「ブリヤート民族にとつては苦難の時代」であつたからである。かれは一八二二年、その後バイカル地區警備のブリヤート＝コザック五〇人長、バンザル＝ボルゴノフの五子の末子として呱々の聲をあげたのであるが、「小傳」は、さうした星の下に生まれたかれが、その運命に抗しつつ生きぬいた三三年間の短い一生（一八五五年歿）を、ツァーリズム治下における少數民族ブリヤートの生活と絡みあはせつつ、深い同情をもつて綴つてゐる。

バンザロフは、トロイツコサフスク露蒙軍事學校・カザン中學（ギムナズイヤ）を經て、一八四二年、カザン大學の哲學部文獻學科に入り、四六年に卒業した。論文⑴は、その年に發表されたものであるが、かれはここで、モンゴル人の新年の祭りツアガン＝サラをとりあげ、これは今日では「白い月（ツァガン・サラ）」の意に理解されてゐるが、「凝乳の月（ツァガン・サラ）」が本義で、モンゴル人が凝乳を食し始める秋に行はれたものらしいが、「佛教が中央アジアに浸透したとき（十三世紀半ば）、ラマ僧が遊牧民の間に自己の曆の使用をもちこみ」、新年を秋から「冬の終りへ移した」のであるといふ。そしてその祭儀の具體的描寫を、マルコ＝ポーロの旅行記から引用し、最後にバンザロフの時代の「白い月」の祭事の模樣をのべてゐる。かれはここで、自說を傍證するものとして、「ブリヤート人のもとでは、八月が牛乳の月とよばれる」ことをあげてゐるが、ルミャンツェフは註二（二五三頁）で、今日ではさうした呼稱の既に忘れらてゐることを指摘し、西ブリヤート人における十二ヶ月の呼稱を紹介してゐる。それは、モンゴル人がその月の自然界の變動・生產物・

特に多く使用するものの名稱を以てその月を呼ぶことを示し、民俗學的に興味深いものである。論文(2)は、カザン大學卒業の際提出した學位請求論文であるが、我國では既に白鳥博士の名譯（「北亞細亞學報Ⅰ」昭和十七・十）によつて知られてゐるので、ここで詳しくのべることは避ける。ただ、東洋學者の注意が「モンゴル人の軍事的活動に向けられ、風俗・習慣・信仰」、「特にモンゴル人が佛教に歸依する以前の信仰」の如きは顧みられなかつた當時において、プラノ＝カルピニ・ルブルクその他の旅行家の記錄、シナ史料の飜譯は勿論、サガン＝セツェン(2)その他モンゴル語・滿洲語の既刊・未刊の諸史料、祈禱書、現地人からの聞書などを自由に利用して、シャーマニズムを縱橫に分析し、體系づけた功は大きく評價されてよい。しかし、今日からみるならば、この勞作が史料的にも方法論的にも既に古くなつてをり、また明白な誤りも少くないことは、註、特にその（一六）・（二九）・（三一）・（五九）・（六五）・（六七）・（一〇八）・（一三〇）その他によつて指摘されてゐるところである。だが一方、「デー＝バンザロフにより『黑教』において組織づけられた一聯の史學＝人種誌學的材料に、適當な加工を施せば、それらはわれわれの時代にとつても甚大な價値をもつものである」ことも、否定できない（クドフリャフツェフ「ブリャート蒙古民族史」（蒙古研究所譯、東京、昭和十八年）四一四頁）。そして、註において、バンザロフの特に方法論に與へられた評價の多くが、母系社會より父系社會へ、トーテミズムよりシャーマニズムへ、といふ一系列・一方的な進化を、あらゆる地域に認めようとする立場からのそれで、主としてあることも、この際注意しておいてよいであらう。

二

一世を瞠目せしめた、この「シャーマニズムの最初の組織的研究」によつて學位を得、大學の業を了へた少壯學徒を待つてゐたのは、しかし、その「コザックの息子」といふ出生から必然的に運命づけられてゐた、爾後二五年にわたるコザック軍隊勤務であつた。かれはそこで、このコザックの身分からの離脫運動のため、一八四七年の末から約半年間、ペテルブルグに滯在することになつたのであるが、この首都滯在は、かれに幸し、多くの實を結ばせた。すなはち、かれはそこで、その地の東洋學者グループに接近し、かれらの間で激しく爭はれてゐた學問的論爭、つまり、ミヌシンスク出土の銀牌子に刻された方形文字の性格に關する論爭に參加することになつたからである。論文(4)・(6)・(7)は、かれがこの問題に對して與へた一つの解答にほかならない。當時、方形文字は、十一世紀前半における西夏（タングート）の李元昊の創製にかかり、パ

スパ以前に、既にモンゴル人の使用するところであつた、従つて、その銀牌子上の方形文字は、西夏文字(タングート)である、といふ意見がグリゴリエフ (Grigor'ev, V. V.) などによつて唱へられてゐたのであるが、バンザロフは、(4)においてその説が歴史的にも成立し難いことをのべ、その銘文と、同じく方形文字で書かれた Buyantu-ɣan の宣勅、Dharmapāla 寡婦の宣勅とを比較して、相互に若干の相異はありつつも、何れもパスパ文字であると結論し、つづいて、西夏文字(タングート)について若干の考察を行つてゐる。(3) このかれの西夏文字(タングート)に關する意見その他には、註にも指摘されてゐるやうに見當外れや誤りもあり、また方形文字の起源についての考察も、今日からみれば常識に屬するといへるであらうが、當時、つまり前世紀四〇年代にあつては、バンザロフの研究は「中央アジアにおいて十一世紀から十七世紀にかけて使用された文字について少なからぬ新資料を加へ、かつこれを解明した」ものであつたのである（前掲「ブリヤート蒙古民族史」四二〇頁所引、サヴェリエフの言葉）。論文(6)・(7)は、この(4)と密接な關係をもつ。先づ(6)では、一八四五年、ドニェプル河畔附近から發見された銀牌子上のウイグル文字を、Moŋke tŋri-yin küčündür / yeke suu ǰali-yin igegen-dür / Abdulla-yin ǰarlɣ ken ülü / büsireküi kümün aldaqu ükükü.（轉寫は、姑くルミャンツェフの註による）と讀み、文中の tŋri, suu, ǰali, igegen, büsireküi, aldaqu の語を、シャーマニズム神觀の考察から、また、Buyantu-ɣan, Dharmapāla 寡婦の宣勅、Arɣun-ɣan の書簡などと比較しつつ、解釋するとともに、シュミット (Schmidt, I. J.)・アヴァクム (Avvakum) の解讀を修正し、つづけて、(4)で扱ったミヌシンスク出土銀牌子の方形文字の問題に移る。すなはちそこには、dėŋ-ri-yin k'u-č'un-dur/moŋ-k'[e]/q'a'an ne-re q'u-t'uɣ-t'ayi/bol-t'u-ɣayi k'en 'eu-lu bu-/s'i-re-gu alda-ɣu 'eu-k'u-gu. と讀めるのであるが（轉寫は、姑くルミャンツェフの註による）、グリゴリエフは、この第二行の moŋ-k'[e] を、Möŋke ɣaɣan を意味するものと考へた。すなはちかれは、さきにも見たやうに、方形文字の創製を、フビライの治世におけるパスパに、ではなく、十一世紀前半における西夏の李元昊に歸した、つまりそれは既にフビライ以前、従つてまたムンケの治世に、モンゴル人の使用するところであつたと考へたからである。これに對してシュミットは、この語はハーンの名前ではなく、その前行の「天」にかかるもので、ただ「永遠なる」を意味する形容詞に過ぎぬとのべ、かくて雙方ともに、それぞれ理由をあげて活潑な論爭を展開した。バンザロフは、この兩者の主要論點を紹介したあとで、歴史的にみても、また、同じく方形文字で書かれた Buyantu-ɣan, Dharmapāla 寡婦の宣勅と比較

しても、グリゴリエフの意見は認められず、これはパスパ文字と考へねばならない、從つてそのパスパ文字で刻された moŋ-k[e] はムンケ=ハーンを意味するものではありえず、寧ろ、この論文の前半で紹介されたドニェプル河畔附近出土銀牌子ウイグル文字銘文の、moŋke tŋri-yin küčündür の moŋke に當るもの、つまり、シュミットのやうに、「天」を形容する「永遠の」の意にとらねばならぬ、そして、この見解は、「天」に對して常に「永遠の」屬性を附與して考へるシャーマニズム神觀とも一致する、と主張したのである。

では、この方形文字による銘文において、moŋ-k[e] といふ語が改行して、しかも、dêŋ-ri の後、q'a'an の前の行に、一段高く刻されてゐるのは、どういふわけか。バンザロフは、これは「最終的には解決できない」「重要な論點」であるが、恐らく、これを刻したシナ人彫刻師が、第一行が第二行より長くなつている原文を見て、その第一行の一番上の語 moŋ-k[e] を、左→右と改行するモンゴル式によつて左へ、ではなく、右→左と改行するシナ式によつて右へ、移したためであり、またその moŋ-k[e] だけが一段高いのは、曾てのハーンたるムンケに對する追憶の意が含まれてゐるのではないか、と推測してゐる。そして最後に、牌子の用途について、その銘文に現はれた強い語調からみて、それは、領內の「戰爭・叛亂など、特に重要な機會に」出されたものではないか、といふ憶說を出してゐるが、この見解が支持し難いことは、箭內・羽田兩博士の研究によつても明らかであり（箭內博士「元朝牌符考」・羽田博士「蒙古驛傳考」「元朝驛傳雜考」）、またバンザロフ自身、つぎの(7)では、この說を撤回してゐる。そこで、(7)に移ると、これは、(4)・(6)で述べられた見解、すなはち、(a)ミヌシンスク出土牌子の方形文字は西夏（タングート）文字ではなくパスパ文字であり、(b)その moŋ-k[e] はハーンの名前ではないことを、ウイグル文字牌子銘文と比較し、ルブルク・プラノ=カルピニ・マルコ=ポーロの所言、シナ史料・大ヤサなどをひきつつ、さらに詳細に展開したものであるが、方形文字銘文で moŋ-k[e] が改行して一段上に刻されたことについては、(6)でのべた理由も考へられるが、またつぎのやうにも推測されるといふ。すなはち、これはもともとムンケ=ハーン治世に、ウイグル文字で刻された銘文を、のち、パスパ文字で書き直したものではないか、つまり、はじめウイグル文字で刻されたとき、當然 tŋri の前におかるべき moŋke の語を、わざと次行との間に、一段上に掲げて記し、この一語が、兩行にかけて讀みうるやうにした、すなはち、第一行では「永遠の」を意味し、次行ではハーンの名前として讀める如くしたのではないか、そしてその形が、パスパ文字に移す際、その儘踏襲されたのではない

かといふ。つづいてかれは、これら牌子の用途について、(6)で提出した意見を撤回し、マルコ=ポーロの所言をひいて、それが、(a)勳功のしるし、(b)パスポートとして與へられたことを指摘し、最後に、シナ史料から、牌子に似たものをいろいろあげてゐる。このやうにバンザロフは、ペテルブルグ滯在中、東洋學者グループの論爭に加はつて、問題解決に一つの寄與をなしたのであるが、同時に、科學學士院の依賴によつて、學士院アジア博物館・公立圖書館所藏のモンゴル・滿洲語書籍、寫本の整理・調査・研究に從事した。その成果の一部が(5)で、そこでは、(一)言語學・(二)「經」つまり古典書・(三)哲學と道德・(四)地理・(五)歷史・(六)法制・(七)佛敎・(八)キリスト敎・(九)軍事・(十)醫學・(十一)文學（歷史的-小說的傳說、小說及び物語）・(十二)雜の各項にわたつて滿洲語書籍・寫本の目錄をあげ、極めて簡單な解題を行つてゐる。また、ポポフの「カルムィク語文典」を批評した(3)、及び、古代ロシアの武器 kuyak（一種の甲（よろひ））、baxterec（一種のくさりかたびら）、tegilyaj（短袖高襟の甲）、džid（投槍）、sajdak, sagadak, saadak（射器一式）の名稱が、それぞれ、モンゴル語の χuyaɣ, begter, degēlei, jïda, saɣadaɣ から來たものであることを指摘し、その傳播の理由、使用された範圍・程度などについて考察した(8)も、このペテルブルグ時代の産物であることを附け加へておく。

三

バンザロフは奔走の甲斐あつてコザックの身分から解放されたが、そのかれに與へられたのは、かれ自身及びその親友の期待に反して、學究生活ではなく、東シベリア總督の下の一官吏の地位であり、かれはその準備のため、一八四八年、カザンへ行つた。しかしバンザロフはその激務の傍、研究をつづけ、ベレジンが出版した「東方歷史家叢書」の附錄として、論文(9)・(10)・(11)・(12)を書いた(4)。先づ(9)では、モンゴルの起源、モンゴルといふ名前の語源に關してイスラム史家・サガン=セツェン・アルタン=トプチなどの傳へるところを紹介したのち、結局 Mongol とは Mon-gol つまりモン河に由來するもので、それは、黄河北岸 Mona 山附近の河であらうといひ、(10)では、チンギスの語義についてイスラム史家・サガン=セツェンなどのいふところを紹介し、要するに「チンギス」とは、「天の子」を意味する匈奴の「單于」の復活であり、シャーマニズムの一靈體 χajïr čïnggis tŋri と通ずるものだらうと推測してゐる。また(11)では、ラシードゥッ=ディンの傳へるモンゴルの始祖說話にのべられた Ergene-qon「險阻な山坂路」の語源を、モンゴル語の ergi「崖・岸」

と、凹地を意味したらしい -χon とから説明し、それは、陰山山脈の一山中にあつたのであらうといふ。そして最後に⑿では、普通 oyirad といふ部族名は、oyira「近く」なるモンゴル語の複數形で、「近親・同盟者」の意と考へられ、これは、オイラートが、四部族から成る「部族同盟」を成してゐたからだ、と説明されるが、それは歷史的にも承認できず――特に、オイラートがドゥルベン-オイラートとよばれるのは、それがチンギス＝ハンの軍隊の四トゥメンを形成するに至つたからで、その「部族同盟」とは直接の關係はないから――、寧ろ、かれらオイラートが、南シベリアの森林地帯に住み、ラシードゥッ＝ディンによつて「森林の民」の一つに數へられてゐることからみて、oi-arad（森林・民）に起源すると考ふべきである、またウイグルといふのは、oi-gur（森林・民）で、ラシードゥッ＝ディンなどにいふ oyin-irgen や上にのべた oyirad<oi-arad の別の形と考へられる、といふのである。以上四つの小論は、その發表當時は、「中央アジアの古代史にすくなからぬ光をなげ、その時まで混亂と晦澁とをきはめてゐたものを簡潔に論理的に解決した」ものであつたらう（前掲「ブリヤート蒙古民族史」四二一頁所引、サヴェリェフの言葉）。しかし今日からみれば、何れも「根據薄弱」で、殆ど支持しえぬこと、これまたこれら四論文に附された七七項目にわたる註の各處において、ルミャンツェフの指摘する通りである。特に「當時の言語學の狀態からして容易に説明のつく」ことながら、かれは「モンゴル語法を全く無視し、フォルクスエティモロギイを唱へ」たにすぎぬ、すなはち、かれの語源論の「最大の缺陷の一つ」は、實にこの「音韻法則の無視」にあつたといへるであらう。たとへば、かれが Mongol の語源として提唱する Mona 山は實は Müne aγula なのであつて、そこからは Mongol といふ言葉は生れ難い（註二八〇、三〇七頁）。そして、歷史的事實としても、その名稱の起源を、たとへかれのやうにモンゴル民族の移動を考へるにしたところで、南モンゴリアに求めることは不可能であらう。また、「チンギス」と「單于」とを同一視することが極めて無理なことはいふまでもない。ルミャンツェフは、「チンギス」の語源に關するパラディ（Palladij Kafarov）・ラムステット（Ramstedt, G. I.）・ヴラヂミルツォフ（Vladimircov, B. Ya.）の諸説を紹介し、要するに「その語源は、百年前におけるが如く、依然謎である」といつてゐる（註三〇六、三一七頁）。つぎに、ergi>erge>erge-ne さらに >ergene-χon といふ變化は極めて困難であり（註三一二、三一八―九頁）、寧ろこれは、同註でいふやうに、Ergüne γool（アルグン河）から理解すべきであらう。また、オイラート・ウイグルの語源に

ついても言ふべきことは多いが、ただここでは、ルミャンツェフが、türk.gi>mong.-yi>-i、つまり *ogi>oyi>oi>oï>ö、また、türk.z>mong.r といふ音韻變化から、*ogizan→mong. *oyiran (pl. oyirad)>kalm. öröt, old. türk.oguz といふラムステット說を紹介してゐることをのべるにとどめる（註三三二、三二五—六頁）。もっともかう考へると、モンゴル語族たる「オイラート」の名を、トルコ語の名稱から說明するといふ新しい障害に突當ること、これまた同註で指摘する通りであるけれども。

バンザロフはそののち、一八五〇年、シベリアへ正式に赴任し、暫くしてイルクーツクに住んだが、そこで完成されたのが、ペテルブルグ時代から手をつけてゐた論文⒀である。この內容については既に、播磨楢吉氏の飜譯（善隣協會調査月報、七十九號）、及びこのバンザロフの解讀を修正したクリューキン（Klyukin, I.）の「ハルヒラ石（チンギス＝ハン石）上の最古のモンゴル語銘文」（ヴラヂヴォストク、一九二七年）を飜譯・紹介した愛岩松男氏の「所謂『成吉思汗碑石』に對する諸研究に就いて」（東洋史研究四—三）、さらに、最近では、村山七郞教授の優れた研究「成吉思汗石碑文の解讀」（東洋語研究四）によつて、我國にも詳細に紹介されてゐるので、ここでは觸れない。ただ、今日ソヴィエトでは、クリューキンの說が定說となつてゐるらしいことは、註三四六（三二九頁）以下によつてほぼ察せられるのであるが、村山教授は上揭論文及び "Über die Inschrift auf dem Stein des Čingis." ("Oriens", vol. III, No. 1, 1950) において、クリューキンによつて否定されたバンザロフの解讀の一部を支持され、小林高四郞博士もそれに從つてをられること（「元朝秘史の研究」、東京、昭和二九年、三一五頁）をつけ加へておく。もつとも、ルミャンツェフは、村山說に言及し、「しかしこの勞作は、本質的に、銘文研究史に、新らしい資料を提供するものではない」と斷言してゐるけれども（註三四六、三二九頁）。とにかく、何れにせよ、バンザロフがここで、シュミットのYerüñke といふ讀みを Isüñke と訂正し、それを、ジュチ＝ハッサルの子イスンケに比定した功は、忘らるべきではないであらう。最後の論文⒁は、ウイグル文字で書かれたトフタミシ＝ハンの宣勅に見えた不明の語について解說し、ウイグル文字が、對外關係、國內事務の重要文書に、原則的に用いられたことをのべたものである。

四

以上の極めて大雜把な紹介によつてもわかるやうに、バンザロフの說は、その後の百年間におけるモンゴル學の進步によつて、訂正さるべきは訂正され、發展さるべきは發展せし

められ、今日においては既に古典に屬してゐる。ここに敢て紹介したのは、一つには、この古典の成果を顧みることが、我國近時のモンゴル學にとつて、決して徒勞ではあるまいと考へたからでもあるが、二つには、その卷末に附された四二二項目に及ぶ豊富な註が、バンザロフが扱ひ、言及した多岐にわたる諸問題に對する、今日のソヴィエト學界の見解を、簡單ながら示してゐると思つたからでもある。註に關しては充分に紹介しえず、またその一部については、上文でも言及したけれども、興味ある幾つか——その見解の是非はともあれ——をあげるとつぎの如くである。すなはち、西ブリヤート人の十二ケ月の呼稱をあげた（二）、モンゴリアへの佛教移入に關する（十二）・（十五）、サガン＝セツェン年代記の研究史についての（二〇）、シャーマニズムの性格について簡單ながらのべた（二九）、オンゴンを分類した（三二）、鮮卑・匈奴の國家・種族に關する（四三）・（四五）（なほ、匈奴の人種については、白鳥博士說を支持してゐるらしい）、etügen, ötüken についての諸說を紹介した（七一）・（八二）、契丹・女眞・西夏文字について簡單にのべた（一七一）（契丹文字解讀については、村山教授の說を、「興味ある研究」としてあげてゐる）、シュミツトによるサガン＝セツェン年代記の出版・飜譯の方法・結果を批判した（一九〇）、ウイグル文字のモンゴルへの移入についてのべた（一九四）・（一九五）、牌子のウイグル文字銘文の研究史を概說した（二〇一）・（二〇三）・（二〇四）・（二〇七）など、「チンギス」なる語の語源についての諸說を紹介した（二九四）・（三〇六）、il～äl なる語に關する諸說を概述した（二九九）、gür-χan の語源を研究した（三〇〇）、いはゆる「オイラート同盟」說を批判し、ドゥルベン＝オイラートについてのべた（三三〇）・（三三一）、「オイラート」の語源に關するラムステット說を紹介した（三三二）、パラス（Pallas）の據つた史料を考へた（三三三）、iltäbär についてのべた（三四三）、「チンギス＝ハン石」に關するクリューキン說を紹介した（三四六）以下、その他である。ここに掲げたのは、ただほんの一部にとどまり、これ以外に、歷史學的に、言語學的に、興味ある說が紹介され、多くの文獻があげられてゐるのであるが、ここでは省略に從はざるをえない。

最後に、卷末の「文獻書目」には、些かでもバンザロフ、及びその學說に觸れたものは、すべてあげたらしく、これまた、便利なものであることをのべて、この蕪雜な紹介の筆を擱く。

註

（1）卷末の「バンザロフの著作目錄」に收められた論文中、ただつぎの二つだけが收められてゐないが、これは、この兩者がともに出版されず、原稿のままに止まつたからであらう。「帝國

科學學士院民族學博物館所藏、佛像（彫像・畫）、及び佛教關係物品目錄」（一八四八年）、「ザヤ＝ハンバのチベット旅行」（モンゴル語からの飜譯）（一九五二年）。

(2) バンザロフは「サナング＝セツェン」といつてゐるが、ここでは「サガン＝セツェン」とよんでおく。

(3) クドフリャフツェフ「ブリヤート蒙古民族史」（邦譯、四一九頁）に、「デー＝バンザロフは……シュミットの正しくない旨を言明し、グリゴリエフの意見を支持した」といふのは誤つてゐる。

(4) 正確にいふと、これらの四論文の一部は、すでにペテルブルグで書かれてゐたらしい。

（東京大學助教授）